

や出土遺物に対する分析は、この地では三五〇〇年以上前にはムギと家畜の農耕が営まれていたことを示している。考えてみれば、シルクロードという東西文化の交易路の存在は、人口密度の希薄な広大な砂漠の存在とは相容れがたい。この地の砂漠化に関する環境史研究が待ち望まれる。

### 異分野交流の史学を

学問分野が違うということは、単に方法論の違いばかりでなく、扱う対象の時間的、空間的スケールの違い、などあらゆる面で異なるということである。また時間や空間の概念の希薄さも学問分野によりいろいろである。こういう状況で、二つの異なる学問分野の結論の部分の違いだけのことさら明らかにしたところで、益ある議論は期待できない。必要なのは、真の分野横断による学問的討議であろう。分野横断、文理融合が言われて久しいが、従来の文理融合は、成果物を文系と理系とを入れ子にしただけの、いわば混合物に過ぎない。真に望まれる文理融合は、化学がいう「化合」の反応であり、今までにはなかった方法や概念の創生である。こうした学問の創生にあたり一自然科学者として歴史学者に希望したいのは、例えば文書に書かれた「歴史的事実」の解釈にあたり、自然科学の方法を積極的に取り入れていただくことである。ある作物の渡来を示す記述に遭遇したとき、緯度帯を超えた移動が緯度帯に沿った移動よりはるかに困難だという植物学の常識を知っているのとそうでないのとでは、解釈がずいぶん違うのではないか。おそらく、「逆もまた真」で、ある土地の環境史

学の構築にあたり自然科学者が文献史学や考古学から学び取った知識やその体系を下敷きに観察することも重要であろう。そうした双方向のかかわりあいの積み重ねが効いてきて、真の分野融合が可能になるのではないかと思われる。

### 〔報告〕

#### 日本のコモンズと環境変動

——サケの資源利用を題材に——

菅 豊

コモンズとは、簡単にいうと「複数の主体が共的に使用し管理する資源や、その共的な管理・利用の制度」であり、かつて日本では入会を始めとして、山野河海の広い領域に広がっていた。コモンズは、コミュニティの基盤にあって、それを支えてきた社会システムとされ、環境や資源の保全、自然アクセスへの公正性、弱者救済などの観点から、現在、注目されている。

日本のコモンズが精緻化されたのは近世であり、それを理解するためには、日本に特徴的な村落統治制度を理解することが必要である。近世において、農村の人々にとって、まず基本的な生活基盤は村、すなわちムラ（共同体）であった。それは村切という形で理念上、明確に空間領域が画定され、それぞれの村は、年貢の納入や法的な管理、検知などを共同に村請けする基本単位であった。それは支配者側にとってみれば、農民を統治する単位で

あり、農民にとってみれば、生計を維持するために必要な共的システムの管理単位であった。この単位の強化が、日本のリジッドなコモンズ生成の大きな原動力になっていたことは間違いない。

一方、俯瞰するならば、このような政治や経済、社会的な要因のみならず、特有の環境条件が、コモンズ生成の大きな要因として考えられる。たとえば、一四世紀半ばから一九世紀半ばにかけて続いた寒冷な期間である小氷期—現在、その影響を疑問視する向きもあるが—。冷涼で不順な天候が局地的に生起、継続したこの時期に、大局からいえば、このような気象条件下では不利なはずの、稲作を中心とする生産構造への転換が推進された。さらに市場経済の影響力を強く受けてきた結果、生存経済は不安定化し、人々の生活は大きなリスクを生じさせた。そして、そのリスクを回避する、あるいは緩和するために、日本の地域社会は、セーフティーネットとしての自然資源—山野河海の資源—を利用する戦略を選択的に保持し続け、さらに、その利用をめぐる社会システムを精緻化させてきたといえる。日本では、自然資源へ適応した技術と、それを管理する共的社会システムを生存戦略に組み込むことによって、自然環境の変動に対応してきたといえる。

本論では、冷涼気候に有利なサケの河川漁業を題材に、日本の共的世界Ⅱコモンズが政治、社会、経済、そして気候などの環境の変動に影響を受けつつ生成、強化されてきた道筋と、その適応戦略を検討する。この様相は東アジア史、とくに中国史との対比によって、特徴がより鮮明になるであろう。

## 生態環境史の視点による地域史の再構築

—中国東南山地丘陵地域の村落と宗族—

上田 信

生態環境史 (ecological history) は、自然環境と人間社会とを貫いて流れている物質とエネルギーに着目し、生態系の一要素としてヒトの立ち居振る舞いの歴史的な変遷を説明することを目的とする。人間と自然とを区分し、人間を主体として自然を客体と見がちな通常の「環境史」とは、発想の起点が異なる。物質とエネルギーの流れは、量的に把握されなければならない。統計データを蓄積する制度が整っていない過去について、定量的な分析に堪える史料は少ない。宗族はその族人に関する個人情報を蓄積しており、分析する方法を開発することで、統計的データを提供しうる。

報告者は一九八〇年代に浙東(浙江省東部)の盆地地帯について、宗族集団が残した族譜を分析する研究を進めた。これらの成果は、中国の若手研究者に受け入れられ、基本的文献は中国語に翻訳された。中国では近一〇年ほどのあいだに、族譜を活用した郷村研究が進み、そのなかで報告者への批判も多々行われ、修正が迫られている。また、中国では伝統的村落の景観が現代化の波のなかで、変容を迫られている。こうした状況のなかで、かろうじて残された〈古村落〉への関心が高まり、実地の調査に基づく報告書・紀行文が数多く出版されている。これらの著作からは、